

喜多祥泰 日本画展

—美の存在と非存在—

【会期】 1月29日(水)~2月4日(火)

【会場】 岡山天満屋 5階 美術画廊

岡山市北区表町2-1-1

☎086(231)7523(直通)



きた・よしひろ

1978年徳島県生まれ。2006年東京藝術大学大学院博士後期課程美術研究科(日本画)修了、博士号取得/博士論文「森 影 響し合い、反響し合い、取り込み合う存在」。現在女子美術大学非常勤講師、武蔵野美術大学通信教育課程非常勤講師。創画会会友。



「guardian deity 天門」8号S



「両界」30号



「to the zenith 梅の花」3号S

東京藝術大学で日本画を学び博士号も取得している喜多祥泰。伝統的な技法を重視しながら描かれる極彩色の画面が、多くのファンを惹きつけてきた。

展覧会のサブタイトル「美の存在と非存在」は、ドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲルの「弓と禅」から着想を得たという。禅の思想はステイブ・ジョブズにも大きな影響を与えたというが、喜多も日本画を描くことによって己の内側を探究し、内的世界を拡張することで、画家としての世界観を拡げようとしている。以下は「弓と禅」の結びの一節である。「すなわち彼は不壊の真理、あらゆる真理を超える真理に、あらゆる根源中の無形の根源に、一切である無に、面々相対しそれによって呑み込まれ、その中から再び生れ出るのである」

新たなテクノロジーが様々な環境を激変させていく現代にあつて、喜多は「お祭りはみんなで時間を共有して楽しむものです。その意味では日本画も同じだと思っていて、鑑賞者はもちろん、楮（こう）を育てる農家、筆や和紙をつくる職人といった関わり合いの中で、みんなが良くなっていきたいと思えます」と語る。

東洋の思想や、自然と共に生きる価値観を大切にして、普遍的なものを見つめながらより豊かな時間を過ごす。今展では、そうした理想を掲げて描いた新作を約40点展示する。是非作品の持つ意味を一つ一つ読み解きながら鑑賞して欲しい。

(編集部)